

「循環のみち下水道」の成熟化



国土交通省 水管理・国土保全局
下水道部長

岡久 宏史

Okahisa Hirofumi

下水道の第一の目的は、汚水の排除・処理と雨水の排除である。まずは、下水道の未普及地域の解消を早急に図り、浸水対策による国民の安全を確保すべきであることを十分承知した上で、今日あるいは将来予測されるであろう下水道を取り巻く数々の社会情勢を踏まえ、今後の下水道のあり方を考えたいと思っている。

そのキーワードは「成熟化」。今後の下水道は、総合マネジメントによる「循環のみち下水道」の成熟化にあると考えている。

平成17年9月「下水道ビジョン2100」が提示された。このビジョンでは、「排除・処理」の機能から、下水道の持つヴァリュー、つまり、水や資源・エネルギーを「再生・活用」する機能に転換し、持続可能な循環型社会の構築を目指すことが示された。いわゆる「下水【道】」から「循環の【みち（道）】」への転換である。この「みち」を進め、発展させ、持続可能な下水道システムを構築させようというものである。

このビジョン実現のため下水道政策を精力的に進めてきているが、今後は、今日まで進めてきた数々の施策に加え、この間の社会状況の変化を受け新たに実施すべき政策を包括し、総合し、下水道インフラの総合的なマネジメントを行うことにより、その「成熟化」を目指す時期に来ているのではないかと考えている。今、今後下水道界が取るべき戦略と国の行動はどうあるべきか明らかにしていきたいと考えている。

このため、「循環のみち下水道」成熟化検討会を開

催し、議論を始めている。その設置趣旨は、次のようなものである。

「下水道は、「循環のみち」へと進化していくことにより、水環境の改善などの従来の目的のみならず、エネルギー問題、低炭素・循環型社会の実現、経済再生、グローバル化（海外への市場拡大）といった「国家的な重要課題に貢献」する可能性を増しており、この貢献が、下水道界の持続性に還元されることが期待できる。このため、「水のみち」「循環のみち」といった基本方針を目指すのみならず、これらの貢献を視野においた「下水道行政の戦略」が重要と考えられる。

一方で、現在の下水道は、厳しい財政事情や事業執行体制の脆弱化など、事業を持続的に運営する上での「リソースの不足」という大きな課題を抱えている。このため、普及や水循環、資源・エネルギー循環などに関する施策のみならず、「下水道行政のプロセス」そのものを重視し、変革することが不可欠である。

本検討会は、施策のあり方ではなく、「下水道インフラを取り巻く下水道界の戦略的な行動」を「下水道インフラの成熟マネジメント」と称し、あるべき戦略と取るべき具体的な行動を検討するものである。

我々はどのような下水道界の姿を目指すのか？産官学全員で共通認識を持って臨まなければならない。その際特に重要なのは、実行すべき行動の具体化である。

「連塾 方法日本 I（松岡正剛著）」に、「今日の日本は、主語になりすぎている。確かに主語なき国はあ

りえないし、主語なき人間もいない。主語は大事なものです。しかし、主語や主題は、20世紀の間に出尽くしてしまったのではないのでしょうか。たとえば、環境を守ろう、地球に優しくしよう、核を廃絶しようというのは当たり前のことです。平和が大事だということも、老人を大切にということも当たり前です。このように、大半の主語や主題は、出揃っている。けれども、何ひとつ実現していない。方法が取りざたされないでいるからです」。との記述がある。

下水道界の主語・主題（行動目標）についても同様のことが言えるのではないか。従来の発想での主語・主題は、ほぼ出尽くしており、当然のこととして理解されている。例えば、生活環境の改善、公共用水域の水質保全、国民の安全・安心を守る、健全な水循環の再生などである。ほぼ実現したものもあり、まだまだこれからのものもある。言い換えれば、これらはコンセプトである。重要なのは、コンセプトを実現するための方法である。「コンセプトからメソッド（方法）」へ頭の切り替えが必要だと思っている。

今後の下水道が取るべき戦略と行動を考え、実行する際の発想の源となるキーワードを、産官学で共有すべきキーワードを打ち出したいと考えている。平成23年度末には取りまとめることとしているが、ご議論いただいた有識者の方々は限られている。さらに熟度を高めるため、下水道界のみならず他業界・異業界の方々からもご意見・ご提案いただきたいと思っている。